

10月10日～11日にかけて長野市で日本薬剤師会学術大会が開催されました。ここ数年は必ず出席するようにしているのですが、例年と比べてランチョンセミナーに余裕があったり、ポスター会場も黒山の人だかりという印象がなく、会場設定がうまくいっているのか、参加人数が少なかったのか定かではありませんが、宇宙飛行士の毛利衛氏の講演まで直にみることができました。初日は特別講演で何か所にべったりと座っていたのですが、今回はまず千葉大学を退官されて現在千葉中央メディカルセンター和漢診療科部長をされている寺澤先生（元富山医科薬科大学和漢診療部教授）の講演を聞いての話題になります。

先生はすでに65歳、医師としてはまだ80歳まではやっていたいと言われています。和漢診療は基本的に新しいことを学ぶ必要はなく、経験の蓄積をもって歳を経るごとによりよい治療が出来る特徴があるとも述べられていました。

今回の話題は和漢治療の歴史や基本的な考え方を具体例を出しながら解説されていましたが、私が印象に残ったのは薬剤師による服薬指導に対する苦言でした。それは和漢治療をあまり理解していない医師にも通じることなのですが、西洋の病名で和漢薬を理解し服薬指導をしようとする姿勢です。

一言でいえば、和漢治療独特の考え方である「証」で患者さんをとらえて服薬指導をしてください。という薬剤師への漢方薬服薬指導への提言という内容のものでした。

漢方薬の服薬指導への提言

桂枝茯苓丸を脊柱管狭窄症の男性に処方した時の話で、その男性が保険薬局で渡された薬剤情報提供書を見ると「更年期障害」と女性への説明になっている。自分は男性だから間違った処方を先生はしているのではないのかと先生に苦言があったそうです。桂枝茯苓丸が「血の滞り（瘀血）の状態を改善する漢方薬」と分かっており、患者さんからの情報をしっかり聞いて、脊椎管狭窄症ということが分かれば、「血液をサラサラにして流れよくして足や腰のしびれや痛みを和らげる薬ですよ」という説明ができるはずで、必ずしも女性だけの薬ではないことも理解できます。つまり、証が合致していれば基本的にどのような西洋医学の病名患者に対しても男女を問わず、漢方薬を使いうる事実をまず理解してもらいたいということです。

このような事例は後を絶たず、数例の事例を示されながら、院外処方箋を出したことによって医師の治療が妨害や破壊をうけたという深刻な状態にまでなったようです。また、漢方薬を構成する個々の生薬の効能を書いている薬局もあり、本来の性質を書いてあればよいのですが、茯苓の利尿効果を、薬局としては患者さんに分かりやすい表現にするつもりだったのでしょうか「おしっこを出をよくする」という利尿効果のみの表現にしてしまい頻尿の患者さんに誤解を与えた例が紹介されていました（どれも富山時代の話か！と背中がゾクリとしたのでした）。

レセコンメーカーが提示する薬効や添付文書ではなかなか証までは行きつかない表現もあり、必ず西洋医学病名が書かれてきます。これはレセプト請求にも反映されるため具体的な西洋医学病名がどうしても必要になるため仕方のない状況です。かといって、薬局で説明する際にも添付文書や薬品情報提供書の形式的な文面を利用しては、漢方専門医に対しては申し訳ない仕事をしていることになります。

回覧

製薬会社の桂枝茯苓丸の添付文書の内容も下記のように様々な表現ですが、下線部が証に相当する表現になります。しかし、脊椎管狭窄症を類推させる表現はどこにもないと言ってよいでしょう。

ツムラでは「体格はしっかりして赤ら顔が多く、腹部は大体充実、下腹部に抵抗のあるものの次の諸症：子宮並びにその付属器の炎症、子宮内膜炎、月経不順、月経困難、帯下、更年期障害（頭痛、めまい、のぼせ、肩こり等）、冷え症、腹膜炎、打撲症、痔疾患、睾丸炎」

小太郎漢方とクラシエでは「比較的体力があり、ときに下腹部痛、肩こり、頭重、めまい、のぼせて足冷えなどを訴える次の諸症：月経不順、月経異常、月経痛、更年期障害、血の道症、肩こり、めまい、頭重、打ち身（打撲症）、しもやけ、しみ」

さらに**某薬局さん**のツムラ桂枝茯苓丸エキスの薬品情報提供書の見てみますと

「更年期障害の頭痛、めまい、のぼせ、肩こり、足の冷えなどを和らげる薬です」

となっており、まさに証の表現が一切なしの寺澤先生が苦言を呈した表現になっていました。

以下は私からの提案ですが・・・

桂枝茯苓丸の説明内容としては、むしろ漢方用語を積極的に使い、薬品情報提供書は保険請求と関わりがありませんから西洋医学的な病名を極力記載しないようにして以下のようにしてはどうでしょうか？用語などで分からないことがあると患者さんとのコミュニケーションも凶れる可能性が拡大する気がします（薬剤師も基本的な概念を十分理解しておかないといけません）。

「少陽病期、瘀血型、実証。気逆を伴う。のぼせ、赤ら顔、上逆感、頭痛、肩こり、両側臍傍の圧痛などを伴う諸症状の改善」

のぼせや赤ら顔など目標となる代表的症状が書いてありますが、少陽病、瘀血、実証、気逆という表現からも多くの病態(たとえば脊椎管狭窄症)を類推することが可能になります。

また刻み生薬使用の場合で個々の生薬が出てくる薬品情報提供書の場合も、特徴を表す表現として下記のようにすると、これは何？ということで会話もはずむかもしれません。意味として記載した読み下し文的な文章の方でもよいかと思いますが。

茯苓：利水滲湿、健脾和中、寧心安神

意味は～過剰な津液を修正し、脾を補い、気持ちを安らかにする。

「過剰な津液を修正」からは水滯の改善が類推でき、浮腫、下痢、頻尿、関節腫脹、めまい、水様性痰などの是正の発想へとつながられると思います。以上のようなことは漢方薬の取り扱いの多いような薬局では進んで実施されているとは思いますが、今回、寺澤先生の講演を聞いて、実施されていない薬局があれば取りいれても良いのではないかと思ったわけでした。

最後にまとめますが、講演の流れの中で寺澤先生が薬剤師に求める漢方薬の服薬指導の心得として次の3点が強調されていたと思います。

- ①漢方治療の基本的な概念(証のとらえ方)を知っておく。
- ②10種類でもよいから繁用される漢方薬について証のとらえ方で理解を深め、自分のものにしておく。
- ③患者さんから、どういう症状で先生から薬を出されたのか聞き出す(コミュニケーション技術の必要性。それは処方医の意図を推測するのに欠かせない技術となる)。

リウマトレックス®トピックス（今回のランチョンセミナーから）

MTXの使用ガイドライン改定で来年の春から、1クール8mg(4Cap)の上限でしたが、1クール16mg(8Cap)まで拡大される予定だそうです。有用性向上しかつ副作用にはほとんど問題がないということだそうです。さらにこれまで2日に分割でしたが、1日投与の選択もあるそうです。